

事 項	砂丘地におけるウイルスフリー種いも「園試系6」を利用したながいも外観品質の改善とその栽培法		
ね ら い	屏風山砂丘地域ではながいも栽培が定着し、砂丘地の特性を生かした栽培が行われているが、近年、いもの尻の尖りなど外観品質の低下が問題となっている。これまで、ながいもの外観品質に関わる要因について検討したところ、尻の尖りの発生に関してはウイルス感染の有無により大きく異なることが明らかとなった。また、ウイルスフリー種いも「園試系6」について砂丘地栽培に適した株間、施肥量について検討した結果、成果が得られたので、参考に供する。		
指 導 参 考 内 容	<p>1 ウイルスフリー種いも「園試系6」導入の効果  「園試系6」はいもの肥大性が良く、ウイルスを罹病している在来種と比べて、いも径が大きくなり、いも重が30～50%増加する。  外観品質では尻の尖りの発生率が大きく減少する。曲がりの発生率に対しては年次間のばらつきはあるが減少効果が認められる。</p> <p>2 ウイルスフリー種いも「園試系6」栽培に適した株間と施肥量  (1) 株間  株間21cm～27cmの範囲では、株間が広くなるといもの肥大性が良くなり、狭くするといもは小さくなるものの密度効果により収量は増加する。高値が期待される2Lの収量を確保するためには株間21cmが適する。  (2) 施肥量  株間21cmの場合、施肥量が減少するといもの肥大が劣り、可販収量が減少する。このため、施肥量は総収量、規格別収量からみて窒素成分換算で基肥1.0kg/a、追肥2.3kg/aが適する。</p>		
期待される効果	砂丘地におけるながいもの安定生産に寄与する。		
利用上の注意事項	砂丘地では保肥力が低いため、県南地域よりも追肥回数を増やすのが望ましい。		
担 当 部 署 (担当者名)	青森県農林総合研究センター砂丘研究部 (渡邊智雄、葛西久四郎)	対 象 地 域	屏風山砂丘地域
発表文献等	平成15～18年度 青森県農林総合研究センター試験成績概要集		

【根拠となった主要な試験結果】

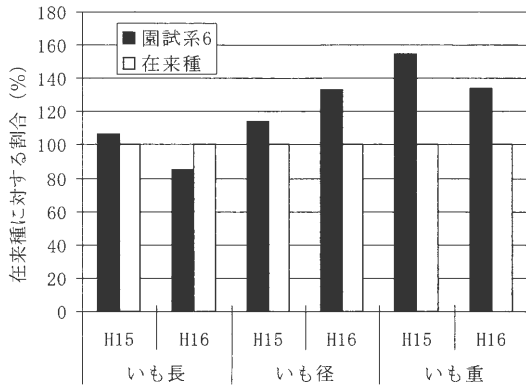


図1 ウイルスフリー種子と罹病種子によるながいもの肥大性の違い (平成15~16年 青森農林総研)

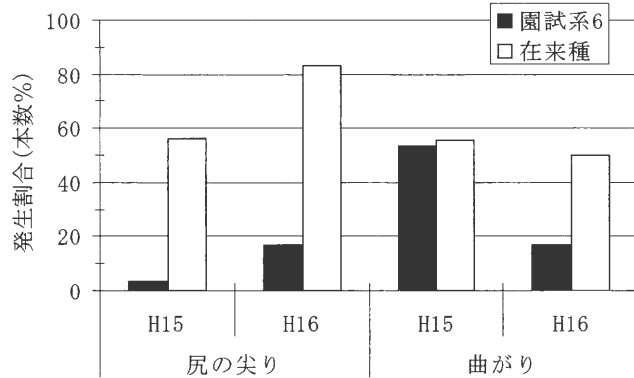


図2 B品いもの障害発生割合 (平成15~16年 青森農林総研)

(注) 耕種概要(図1、2 共通)

供試品種 ①園試系6 (ウイルスフリー種いも)

②在来種 (場内で継代し、ウイルス感染が認められる種いも。元々、県南地域から導入した品種で、いもの形は園試系6の親系統に近いと考えられる。)

植付日 H15: 5月30日、H16: 5月18日

栽植距離 うね幅130cm×株間24cm

施肥量 (Nkg/a) 基肥: 1.0 (萌芽期施肥、CDU555使用)

追肥: H15 0.5×6回、H16 0.4×2回+0.5×4回 (燐硝安加里S646使用)

H15年は網室内での栽培

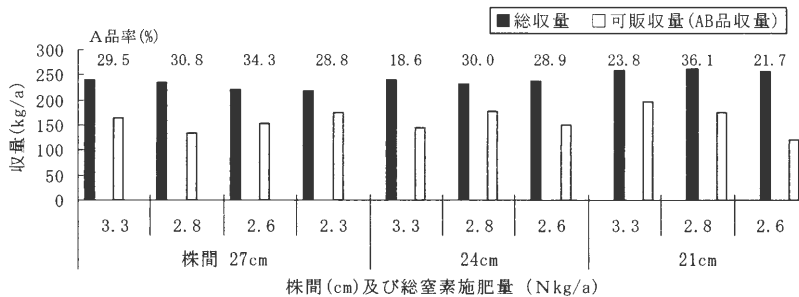


図3 株間及び施肥量がながいもの収量に及ぼす影響 (平成18年 青森農林総研)

(注) 耕種概要(図3、4 共通)

品種 園試系6 (切りいも(ウイルス未感染)、100±10g)

うね幅 130cm

施肥量 (Nkg/a) 基肥 1.0 (CDU555使用)

追肥 7/27~9/7まで5回に分けて尿素を施用。

リン酸施肥量は全区同量で、追肥1回目に1.6kg/aを施用。

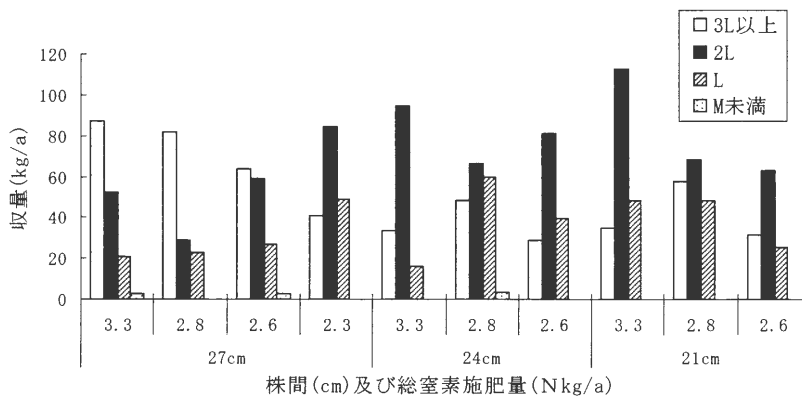


図4 AB品の規格別収量(平成18年 青森農林総研)

(注) 耕種概要は図3と同じ。